

Ⅲ. 俳句をよもう テキストリスト

番号	作品	作者	季語	季節	テーマ	備考
1	古池や 蛙飛びこむ 水の音	松尾芭蕉	蛙	春	蛙	
2	菜の花や 月は東に 日は西に	与謝蕪村	菜の花	春	月	
3	暖かや 飴の中から 桃太郎	川端茅舎	暖か	春	飴	
4	梅一輪 一輪ほどの 暖かさ	服部嵐雪	梅	春	暖か	
5	雪とけて 村いっばいの 子どもかな	小林一茶	雪とけて	春	子ども	
6	菜の花や 小学校の 昼げどき	正岡子規	菜の花	春	昼	
7	春雨や 猫に踊りを 教える子	小林一茶	春雨	春	猫	
8	春雨や 蜂の巣つたう 屋根の漏れ	松尾芭蕉	春雨・蜂の巣	春	蜂	
9	流れつつ 色をかへけり しゃぼん玉	松本たかし	しゃぼん玉	春	しゃぼん玉	
10	おもしろや 今年の春も 旅の空	松尾芭蕉	春	春	空	
11	春の海 ひねもす のたりのたりかな	与謝蕪村	春の海	春	春	
12	ひく波の 跡美しや 桜貝	松本たかし	桜貝	春	貝	
13	卒業の 兄ときてゐる 堤かな	芝不器男	卒業	春	卒業	
14	故郷や どちらを見ても 山笑ふ	正岡子規	山笑う	春	笑う	
15	さまざまの事思ひ出す桜かな	松尾芭蕉	桜	春	桜	
16	春風や 牛に引かれて 善光寺	小林一茶	春風	春	牛	
17	遠足の おくれ走りて つながりし	高浜虚子	遠足	春	遠足	
18	行く春や 鳥啼き魚の 目は泪	松尾芭蕉	行く春	春	涙	
19	山路来て 何やらゆかし すみれ草	松尾芭蕉	すみれ	春	山	
20	山門を 出れば日本ぞ 茶摘み歌	田上菊舎	茶摘み	春	日本	
21	楽しさや 青田に涼む 水の音	松尾芭蕉	青田	夏	楽しい	
22	こんこんと 水は流れて 花菖蒲	臼田亜浪	花菖蒲	夏	水	
23	さみだれや 大河を前に 家二軒	与謝蕪村	五月雨	夏	家	
24	五月雨を あつめて早し 最上川	松尾芭蕉	五月雨	夏	雨	
25	神田川 祭の中を ながれけり	久保田万太郎	祭り	夏	祭	
26	夕飯や 花火聞ゆる 川開き	正岡子規	川開き	夏	花火	
27	くちびるに 触れてつづらや さくらんぼ	日野草城	さくらんぼ	夏	さくらんぼ	
28	蟻の道 雲の峰より つづきけり	小林一茶	雲の峰	夏	蟻	
29	夏河を 越すうれしさよ 手に草履	与謝蕪村	夏の河	夏	夏	
30	閑さや 岩にしみ入る 蟬の声	松尾芭蕉	蟬	夏	蟬	
31	蛍狩り 袋の中の 闇夜かな	正岡子規	蛍	夏	夜	
32	蟬鳴くや つくづく赤い 風車	小林一茶	蟬	夏	赤	
33	たたかれて 昼の蚊を吐く 木魚かな	夏目漱石	蚊	夏	蚊	
34	板の間に 子の這ひかかる 西瓜かな	使帆	西瓜	夏	スイカ	*季節「夏」で分類
35	朝露に よごれて涼し 瓜の泥	松尾芭蕉	涼し	夏	涼しい	瓜の泥-瓜の土 の別形あり
36	こがねむし なげうつ闇の 深さかな	高浜虚子	こがねむし	夏	虫	
37	やれ打つな 蠅が手をする 足をする	小林一茶	蠅	夏	蠅	
38	夏草や 兵どもが 夢の跡	松尾芭蕉	夏草	夏	夢	
39	風鈴に 起きて寝ざめの よき子かな	高橋淡路女	風鈴	夏	風鈴	
40	蛸壺や はかなき夢を 夏の月	松尾芭蕉	夏の月	夏	蛸	

番号	作品	作者	季語	季節	テーマ	備考
41	親よりも 白き羊や 今朝の秋	村上鬼城	今朝の秋 (立秋)	秋	羊	
42	秋晴の どこかに杖を 忘れけり	松本たかし	秋晴れ	秋	忘れ	
43	昼飯を ぶらさげている かがしかな	小林一茶	かかし	秋	昼飯	
44	やはらかに 人分行くや 勝相撲	高井几董	相撲	秋	相撲	
45	上行くと 下来る雲や 秋の空	野沢凡兆	秋の空	秋	空	
46	あの月を とってこれろと 泣く子かな	小林一茶	月	秋	月	あの月を一ヶ月をの別影あり
47	名月や 池をめぐりて 夜もすがら	松尾芭蕉	名月	秋	池	
48	秋風や 模様のちがふ 皿二つ	原石鼎	秋風	秋	模様	
49	荒海や 佐渡に横たふ 天の川	松尾芭蕉	天の川	秋	川	
50	うつくしや 障子の穴の 天の川	小林一茶	天の川	秋	穴	
51	街道を きちきちとどぶ ぼったかな	村上鬼城	バツタ	秋	バツタ	
52	柿食へば 鐘がなるなり 法隆寺	正岡子規	柿	秋	柿	
53	秋の夜や 障子の穴が 笛を吹く	小林一茶	秋の夜	秋	笛	
54	この道や 行く人なしに 秋の暮	松尾芭蕉	秋の暮	秋	道	
55	秋の暮 大魚の骨を 海が引く	西東三鬼	秋の暮	秋	骨	
56	秋の夜や 紅茶をくぐる 銀の匙	日野草城	秋の夜	秋	お茶	
57	よそになる 夜長の時計 数へけり	杉田久女	夜長	秋	時計	
58	秋深き 隣は何を する人ぞ	松尾芭蕉	秋深き	秋	秋	
59	戸を叩く 狸と秋を 惜みけり	与謝蕪村	秋惜しむ	秋	ためき	
60	星空へ 店より林檎 あふれをり	橋本多佳子	りんご	秋	りんご	
61	猫の子が ちよいと押さえる 落ち葉かな	小林一茶	落ち葉	冬	落ち葉	
62	故郷の 雨の音聞く 布団かな	久保田万太郎	布団	冬	布団	
63	団栗の 共に掃かるる 落ち葉かな	正岡子規	落ち葉	冬	どんぐり	
64	ストーヴに 椅子ひきよせて 読む書かな	杉田久女	ストーブ	冬	ストーブ	
65	ずぶぬれの 大名を見る こたつかな	小林一茶	こたつ	冬	こたつ	
66	淋しさの 底ぬけてふる みぞれかな	内藤文草	みぞれ	冬	さびしい	
67	朝めしに 三度鼻かむ 寒さかな	横井也有	寒さ	冬	鼻	
68	いざ行かむ 雪見にころぶ ところまで	松尾芭蕉	雪見	冬	雪	いざ行かむーいざさらばの別影あり
69	こがらしや 海に夕日を 吹き落とす	夏目漱石	こがらし	冬	夕日	
70	磯千鳥 あしをぬらして 遊びけり	与謝蕪村	千鳥	冬	あそび	
71	襟巻に 首引入て 冬の月	杉山杉風	襟巻・冬の月	冬	冬	
72	雪だるま 星のおしやべり べちやくちやと	松本たかし	雪だるま	冬	雪だるま	
73	戸に犬の 寝がえる音や 冬ごもり	与謝蕪村	冬ごもり	冬	犬	
74	うまそうな 雪がふうわり ふうわりと	小林一茶	雪	冬	うまい	ふうわりとーふうわりかなの別影あり
75	水枕 ガバリと寒い 海がある	西東三鬼	寒い	冬	寒い	
76	いくたびも 雪の深さを たずねけり	正岡子規	雪	冬	雪	
77	元日や 晴れてすずめの ものがたり	服部嵐雪	元日	冬	元日	
78	寝て聞くや ぺたりぺたりと 餅の音	夏目漱石	餅	冬	餅	
79	雪の朝 二の字二の字の 下駄のあと	田捨女	雪	冬	字	
80	かくれ家や 歯のない口で 福は内	小林一茶	福は内	冬	歯	

